

中学校<sub>10</sub>

平成 10 年 度

# 教育研究員研究報告書

道 徳
-----

東京都教育委員会

平成10年度

教育研究員名簿(道德)

分科 会名	区市町 村名	学 校 名	氏 名
第 一 分 科 会	中 央 新 宿 板 橋 江 戸 川 府 中 多 摩	佃 中 学 校	○ 石 井 良 子
		牛 込 第 二 中 学 校	◎ 新 妻 茂
		赤 塚 第 一 中 学 校	仲 尾 エ リ
		鹿 本 中 学 校	吉 田 和 弘
		府 中 第 八 中 学 校	千 金 楽 和 久
		西 落 合 中 学 校	高 田 文 吾
第 二 分 科 会	江 東 世 田 谷 練 馬 立 川 保 谷 羽 村	深 川 第 三 中 学 校	中 村 千 里
		桜 丘 中 学 校	鮫 島 千 惠 子
		開 進 第 一 中 学 校	○ 益 子 文 彦
		立 川 第 八 中 学 校	室 賀 真 砂 美
		柳 沢 中 学 校	湯 浅 泰 美
		羽 村 第 二 中 学 校	八 木 一 彦

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部主任指導主事 峰 川 一 義

研究主題

生徒の心に響く道徳の時間の指導

目次

I	研究主題設定の理由	2
II	内容項目 2 - (3) 「友情・信頼」についての指導 (第 1 分科会)	4
1	主題設定の理由	4
2	研究の内容と方法	5
(1)	友情にかかわる生徒の実態	5
(2)	内容項目 2 - (3) のとらえ方	5
(3)	発達段階における指導の内容	6
(4)	指導の工夫	7
(5)	指導事例	10
3	内容項目 2 - (3) 「友情・信頼」のまとめ	13
III	内容項目 2 - (5) 「他に学ぶ広い心」についての指導 (第 2 分科会)	14
1	主題設定の理由	14
2	研究の内容と方法	15
(1)	内容項目 2 - (5) にかかわる生徒の実態と指導内容のとらえ方	15
(2)	指導の工夫	17
(3)	指導事例	20
3	内容項目 2 - (5) 「他に学ぶ広い心」のまとめ	22
IV	まとめと今後の課題	24

## I 研究主題設定の理由

現代社会では、物質的には豊かになったものの、精神面では、規範意識の希薄化、責任感の欠如、他者への思いやりや感謝の心の減退など様々な問題を抱えている。このような問題に対しては家庭・学校・地域社会がそれぞれの教育力を発揮していくことが大切である。とりわけ学校においては道德教育がその中心的な役割を果たしていくことが期待されている。学校における道德教育は教育活動全体を通して行われるが、中でもその「かなめ」として道德の時間を充実させていく必要がある。

現在行われている道德の授業に目を転ざると①授業に対する取り組みに、学校差や教員による個人差が大きい②道德の授業時数が確保されていないなどの問題点が挙げられる。これらは教師たちが道德教育に対する理解が十分になされていなかったり、道德の授業が安易に学校行事や学級活動などに振り替えられていることに起因していると考えられる。また、道德の時間については、生徒の心に響かない形式化した授業であったり単に徳目を教え込むような教師からの一方的な授業になっているとの指摘もある。私たちは、このような授業の改善を図り、生徒の心に響く授業を目指すこととした。

次のページの図は「生徒の心に響く道德の時間はどうかあったらよいか」を研究員一同で話し合いまとめたものである。上述のような「道德の時間の課題」に対して、教材の工夫、指導過程の工夫、指導方法の工夫など多岐にわたり改善の方策を検討した。教材の工夫としては、体験的・実践的活動との関連性をもたせたり、現実でありそうな題材を教材化することにより、生徒の興味・関心を引き出すことが大切であると考えた。指導過程では導入時にアンケート調査の結果を提示したり、教師が生徒の思いもよらぬ投げかけを試みることに、展開では疑似体験をさせたり、話し合いを活性化するために教師の発問の意図を分かりやすく精選したり、生徒の発言に対して率直に受け入れる態度をとることや、様々な発言を予測していくつかの展開を用意しておくなどの工夫を考えた。また、話し合いを重視し、教師と生徒の一问一答の話し合いに終始することなく、生徒同士の有機的な話し合いとなるように配慮した。

これら様々な工夫に加え、生徒と共に考え、悩み、感動を共有していく教師の姿勢を示し、生徒が自ら考えることを大切にしたいと道德の授業にしたいと考えた。

以上のことから、研究主題を「生徒の心に響く道德の時間の指導」とし、「生徒がまさに自分のこととして、その主題に向き合い、自ら考えることを大切にしたいと道德の授業」を目指し、主として他の人とのかかわりに関することに視点を置いて第1分科会は、内容項目2-(3)「友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うようにする」を、第2分科会では、内容項目2-(5)「それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解して、謙虚に学ぶ広い心をもつようにする」をそれぞれ取り上げ、内容項目のとらえ方、生徒の実態把握、資料の選定、指導過程や指導方法の工夫などについて研究することを通して、研究主題に迫ることとした。

# 心に響く道徳の時間

## 道徳の時間の課題

- 学校全体で取り組まれていない
- 取組に学校差や教員による個人差が大きい
- 授業時間が確保されていない
- 計画性が十分ではない

- 学年が進むにつれて道徳の時間を楽しいと思う生徒が少なくなる
- 指導過程がパターン化している
- 教師が望ましいと考える行動を押し付ける
- 資料や話がつまらない
- はじめから分かっていることしかない
- 教材を読むだけ、見るだけ
- 作文や感想を書かせるだけ
- 発達段階に即した教材の選定がされていない

- 単に徳目だけを教え込むだけの指導
- 指導方法が画一的
- 感動が少ない
- 本音で語り合えない
- 望ましい行動の仕方を押し付けてしまう

## 形式化した授業

- 生徒自ら考える場面が少ない
- 態度や行動に表しにくい

## 教材の工夫

- 体験的・実践的活動と関連した教材の選定・開発

- 読み物資料の選定・活用
  - 身の回りの問題を題材にして、現実の問題を考える
  - 偉人の伝記等から先人の生き方に触れる
  - 名作から感動を得る
  - 古典、随想、民話、詩歌、論説など多様な資料を発掘する

- テレビ・ビデオの活用
  - 心を揺るがすドラマの活用
  - 先人の偉大さに触れる歴史番組の活用
  - 社会的な問題を考えるドキュメンタリーの活用
  - 未来への夢を与える科学番組の活用
  - アニメーションの活用

## 体験の教材化

- 調査や観察結果
- ボランティア
- 学校行事

## 指導の工夫

### 指導過程の工夫

- 導入の工夫
  - 生活経験の想起
  - アンケートの結果等の提示
  - 資料に関する絵画や写真の提示
  - 新聞記事、生徒作文、詩や短歌などの提示
  - スライド、TP等の提示

### 発問の工夫

- 分かりやすい発問
- 登場人物に置き換えて考えさせる
- 自分の問題として受け止めさせる

### 終末の工夫

- 結論を押し付けない
- 教師の体験談を語る
- 感想を書かせ発表させる

- 生徒の心情に訴える
- 葛藤を起こさせる

## 評価の工夫

- 指導と評価の一体化
- アンケートの工夫

### 指導方法の工夫

- 一つの方法に偏らない指導
- 座学だけの指導からの脱却
- 動作化や役割演技

### 話合いの工夫

- 小集団の話合い
- バズセッション
- ディベート

### 体験を取り入れる

- 教科、特別活動での体験
- ボランティア、自然体験、郷土の伝統・文化

### 資料の工夫

- 興味・関心を喚起できる課題の設定
- 日常生活に即して考えられる資料
- 多様な価値観を引き出せる資料

### 説話の工夫

- 人材の活用
  - 地域の人材の活用
  - 担任以外の教師とTT

- 感動を与える
- 音響効果の活用

生徒が自ら考えることを大切にしたい道徳の授業

## 第1分科会

- 内容項目2-(3)
- 資料「ともだち」
- 資料選定の観点
  - 生徒の自由な発想を引き出せるもの
- 導入の工夫
  - 教師と生徒が共に考える姿勢を示す
- 展開の工夫
  - 生徒の多様な反応に対応できるような構造図
- 発問の工夫
  - 中心になる発問を一つに絞り、じっくり考えさせる
- 終末の工夫
  - 教師による体験談

## 第2分科会

- 内容項目2-(5)
- 資料「最後の運動会」
- 教材の工夫
  - 自作資料
  - 身近な題材で興味関心の高いもの
  - 多様な価値観を引き出す題材
- 指導方法の工夫
  - 疑似体験の導入
  - グループによる話し合い
  - 登場人物の一枚絵を提示する
  - 色カードの使用
- 発問構成の工夫
  - 子どもの反応により展開を考える
- 終末の工夫
  - 教師の体験談
  - アンケートの工夫

## ○生徒と教師、生徒相互の人間関係の充実

- 生徒と共に考え、悩み、感動を共有していく教師の姿勢
- 教師が生徒の意見を受容し、理解する姿勢

## Ⅱ 内容項目 2 - (3) 「友情・信頼」についての指導 (第 1 分科会)

### 1 主題設定の理由

「友情は喜びを倍にし、悲しみを半分にする」というシラー (ドイツの詩人) の言葉は今も変わらない真理であろう。いざというときに頼れる友人がいることほど、心強いことはない。しかし、現実には、心ではかけがえのない友人を欲していながらも、そのような友人を得られない場合もある。問題は、「どうしたら、そういう友情がつかれるか」なのである。

最近の中学生の特徴として、少子化が進んでいることと併せて、小さい頃からコンピュータゲームなどで一人で遊ぶことが多く、生徒同士の触れ合いや人間関係を学ぶ機会が乏しいため友人との濃密な人間関係を築くことのできない生徒が多い。また、他人と同じようにしていないと安心できないという心理が働き、必死に大勢にしがみつこうとする傾向が強く、周りの友達から自分がどう見られているかということに非常に気にする生徒もいる。

「友達がいるから学校は楽しい」という生徒が多くいる一方で、友人関係で悩んでいる中学生も少なくない。「友達は多いが心から話せる親友はいない」という生徒もいる。「今まで親しくしていた友達が急に冷たくなった」「友達から無視されていて、とてもつらい」という悩みをもっている生徒もいる。心の中では、友達が欲しているが、どうしたらよいか分からずにいるのが実態ではないだろうか。また、中学生の場合、自分の悩み事を相談するのは、親や教師ではなく、友達が多いという調査結果もある。

ただ単なる友達関係では、利己的な言動や安易な妥協が生じて低きに流れやすい。したがって、お互いの向上をめざす「真の友情」をはぐくむことが必要なのである。互いにもたれあうのが友情ではない。自立した同士が、相手を思い、忠告や励ましあいなどを通じて、心と心をしっかりと結び合わせて互いに高め合っていくのが友情である。したがって最終的には、「友情」は自分自身の成長や生き方にかかわってくる問題である。

以上のことから、第 1 分科会では、「心に響く道徳の時間の指導」として、内容項目 2 - (3) 「友情・信頼」を取り上げることにした。道徳の授業は、とかく押し付けになりがちだとか、形式化してつまらないなどという声を聞くが、内容項目のとらえ方、資料選定、発問の工夫などについて研究することにより、それらの課題へ迫り、「生徒の心に響く」ことを追求することとした。

また、授業指導案を作成するにあたり、以下の仮説を立て、研究を進めた。

#### 仮説

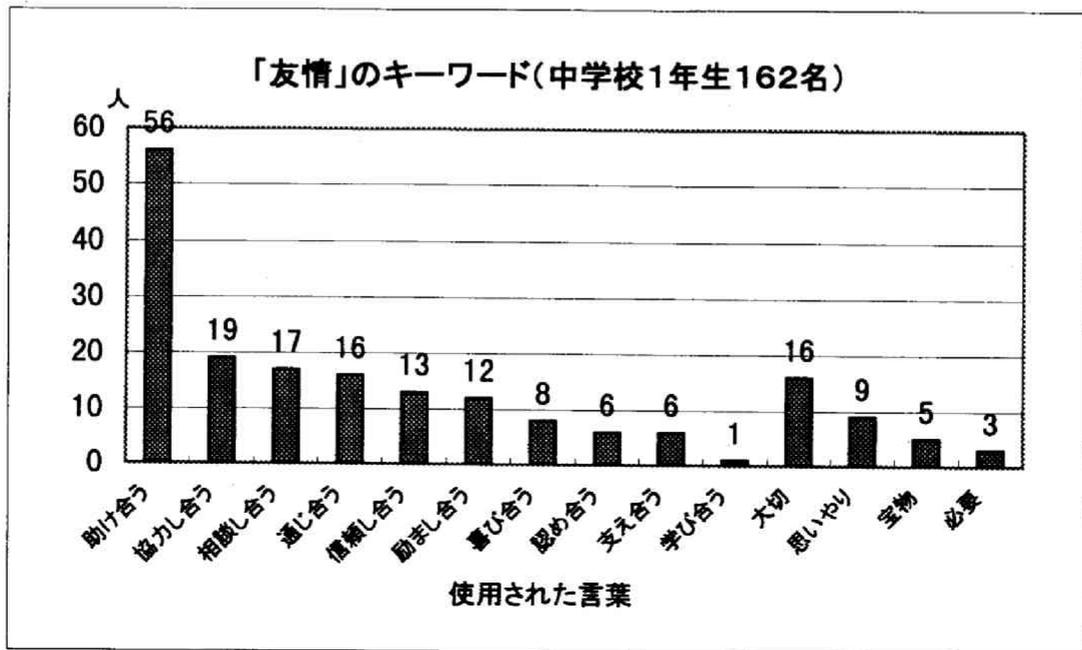
身近にある人間関係を生徒と教師が共に考えていくことによって、友情の尊さや信頼できる友達をもつことの大切さに気付くことができる。

## 2 研究の内容と方法

### (1) 友情に関わる生徒の実態

「友情・信頼」は人間が生きていく上で欠くことのできない身近な問題であり、近年人間関係が希薄になってきたと言われる中学生にとっては切実な問題である。

下のグラフは、都内A中学校1年生162名に「友情とは」という自由記述のアンケートを行い、キーワードを抜き出した結果である（複数回答）。



グラフからは、その個人の経験や環境、その他の要因により、様々なとらえ方があることがわかる。中でも「～合う」という表現が多く使用されていることは、互いに個人として尊重しながら、互いを高めることができる「やりとり」ととらえていると判断できる。特に、「助け合う」をキーワードにあげた生徒が全体の3分の1を占めていることから、生徒は、楽しいときだけではなく、困ったときや苦しいときに共に力になれる存在を欲しており、また、自分もそうなりたいと思っていると推測できよう。

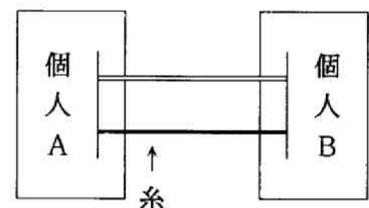
### (2) 内容項目2-(3) 「友情・信頼」のとらえ方

ここでは「友情」を次のようにとらえてみた。友情には、「対等な個人と個人を結ぶ『心のつながり』」が大切である。右の図は上記のことを表したものである。

図において、個人Aと個人Bは対等な人間関係であり、両者を結ぶ糸が「心のつながり」である。この図を使い、友情の成り立ちを説明すると次のようになる。

個人と個人の友情は、意図的であるなしにかかわらず、両者の心のつながりとなる糸がかけられることから始まる。

例えば、Aという人がBという人に好意や好感をもって、心のつながりである「最初の糸」を相手にかける。



「心のつながり」

そこには、気が合うとか、趣味が同じなどの結びつきがあると、BがAに、AがBにと糸のかけ合いを繰り返していき、やがて両者をつなぐ糸は幾重にも重なっていく。そして、その糸は、決して途切れることはないのである。すなわち、ゆるぎない友情がそこに確立されるのである。このようにして、友情は生まれはぐくまれていくととらえたのである。

それでは、その「心のつながり」とはいったいどういうものであろうか。「助け合う、協力し合う、相談し合う、通じ合う、信頼し合う、励まし合う」というように、双方向的なやり取りを指している。道徳の時間においては、心と心のつながりに焦点を絞ることにより、生徒一人一人が、自分ならばどうしたいという気持ちを確認・発見することができるのである。そして、相手に対する温かいまなざしや心のつながりの大切さに気づき、「真の友情とは何か」を自分なりに考えはじめることができるのである。また、このような作業を経ることにより、たとえ今現在、親友と呼べる人がいなくとも、将来、「友情」を得られるように自分の生き方・在り方を考えるための準備期間ととらえさせることができる。

### (3) 発達段階における指導の内容

現行の小学校及び中学校の学習指導要領によれば、「友情・信頼」にかかわる指導内容は以下のようにになっている。

#### 小学校

低学年 友達と仲よくし、助け合う。

中学年 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。

高学年 互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。

#### 中学校

友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うようにする。

小学校低学年では、身近にいる友達と仲よく活動し、助け合うことの大切さを指導することから入り、中学年では、健康的な仲間集団を育成するために、友達と互いによく理解し、信頼し、助け合えるよう指導していく。さらに高学年では、第二次性徴期に入るため異性に対する正しい理解と男女間の友情を育てることが必要である。

理想と現実のギャップに悩む時期でもある中学生にとって、友達は生きる喜びを支えてくれる存在である。心から信頼できる友達をもつためには、互いに「好意的な姿勢で、あるがままの自分を見てくれる存在」であることに気付かせることが必要である。また、多くの人間に対する温かなまなざしが必要でもある。そして、友達関係の在り方は、一人一人の成長や生き方にかかわってくることを理解させることが大切である。

しかし、ただの友達関係では、仲間同士の気安さからわがままや利己的な言動、はては感情の行き違いがあったりと、もろさを露呈することも少なくない。だからこそ、相手に対する共感的理解をもとに、忠告、激励、協力等を通して、お互いを向上させるような温

かくも厳しい「真の友情」を培っておく必要がある。

#### (4) 指導の工夫

##### ア 資料の選定

資料は生徒に道徳的価値についての自覚を深めさせる。資料として大切なことは、生徒が自分をそれに重ね合わせてとらえることができるかということである。生徒が実感として受け止めることのできる人間の姿が描き出されていることが大切である。さらには、どのようにすれば実現することができるかという手掛かりを含んだ資料が、生徒にとって有益である。

例えば、友達を求める気持ちや心のつながりを求める気持ちは、人間の自然な姿であろう。そして、どうすれば心のつながりを築いていくことができるかという手掛かりを資料の中の登場人物の行為や言動に見だし、自覚を深めることができれば有効な指導となりうる。資料「ともだち」は、こうした点を具備している資料である。

また、今回この資料を選定したもう一つの理由に、その簡潔さがある。それは、背景や人間関係、経緯や結果などがあまり具体的には描写されていないということと、登場人物が少なく、ストーリーも短いということである。そのため、生徒の自由な思考を引き出すことができると考えた。

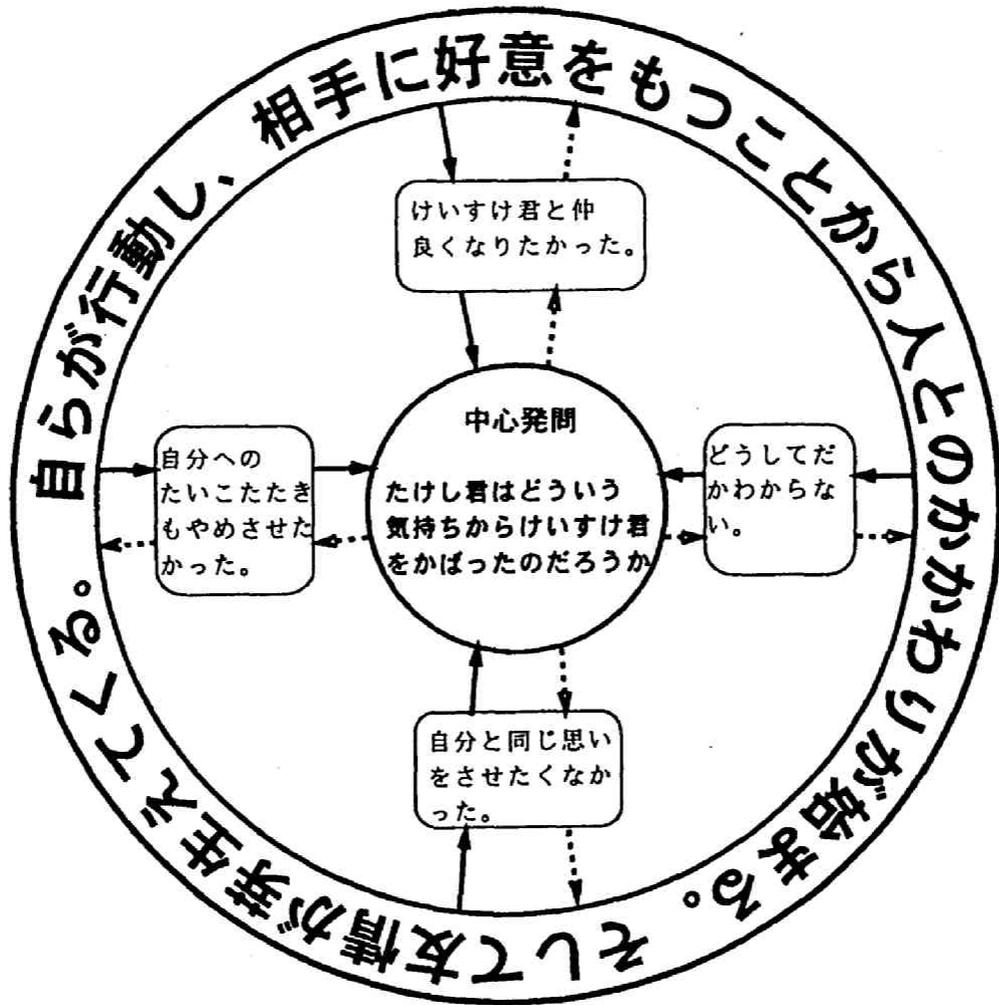
##### イ 授業展開の構想図

資料「ともだち」での授業展開を構想する場合に留意した点は次の通りである。

- ①はじめの問題の内容ととられてしまうなど、ねらいから大きくそれる恐れがある。
- ②生徒は、まず、どちらが正しいか否かというような表面的なものでとらえるであろう。
- ③次いで生徒の反応は多岐にわたるであろう。

①については、展開の前段ではじめの問題を考えるのではないという教師の方向づけで回避できる。②、③の点については、発問を一つに絞ったことから派生するであろう生徒の反応に対して、40人のそれぞれに対応できるように、次項の図のとおり、展開の流れを同心円の中心から外側へ進む形をイメージ化した。

生徒は中心発問に対して、中心から外側の4つに代表されるような反応が予想されるが、他の生徒の反応や教師の補助発問などにより自らの考えを深め、確認することを行い、ねらいとする一番外側にたどり着くという形の展開を構想した。例えば、「たけしくんのはじめの気持ちは友達になりたかったからこの行動があった」というものから、「なぜ、わざわざこのようなわざとらしい行動をとったのかわからない」といった正反対の反応が予想される。生徒の反応は、他の生徒のそれぞれがイメージしたものから影響され、さらに中心発問により「たけしくん」の気持ちを再度考えることで自らの考えを深めた時、友情というものが生まれる出発点を見いだせると考えた。



#### ウ 中心発問について

「友情」が芽生えるきっかけの一つとして「相手に好意をいやく」ところから始まるとするならば「話しかける」「親切にする」「助ける」など、まず、「好意や好感を相手に伝える行動」、つまり、こちらの感情を何とかして相手に伝えようとする行動がある。

既に内容項目のとらえ方で述べられているが、私たちは、友情を「対等な個人と個人を結ぶ心のつながり」と、とらえている。生徒たちは、友達を求める気持ちを強くもち、さらに心のつながりをも強く求めている。しかし、どうすればそれを築いていくことができるのかが分からないのではないか。そこで、資料「ともだち」の登場人物であるたけし君のとった行動を考えることにより、心のつながりを築いていく過程では、自らの意志を行為に表わすことが最初に必要であることに気付き、手段としての「糸のかけ方」を学び、今後出会うであろう「友情」をはぐくんでいくときに、自らの方向性を決定していく判断基準の一つになるのではないかと考えたのである。

資料「ともだち」では、主な登場人物が二人である。この二人のそれぞれの気持ちをどのように理解するか、または、どちらの気持ちを理解し、ねらいを定めるかが重要な点といえる。

それぞれの人物像は

たけし：けいすけが好きらしい。友人になりたいという気持ちが読み取れる。  
けいすけ：本当の気持ちが分かりにくい。たけしの好意を頑なに拒否する。

この二人のどちらに主眼を置けば、課題の友情について理解しやすいかを考えた場合、

たけし：相手にどのように思われようと、好意をはっきりと行動で示している。  
けいすけ：周囲の様子をうかがいながら行動をしている。

このように分析することで、主題である「心と心のつながり」を結ぶ作業を、実際に行動しているたけしくんの気持ちを中心にとらえていくことの方が、はっきりととらえられるであろう。

一方、けいすけくんの気持ちも、実はたけしくんの行動によって揺れ動いている。

けいすけ：たけしくんはあまりしゃべらないし、いつもそばにくっついてくるから…  
たけしくんは、たまたま同じクラスになっただけ…。いやなら、別な場所にいればいい。

これらの言葉のなかに、気になる存在であることが推測できる。しかし、行動を起していないけいすけくんに焦点を当てた時、終末の部分では生徒の反応が予想できずに展開することとなるので、ここでは、はっきり行動しているたけしくんに焦点を置くこととした。

ではたけしくんの気持ちのどこの部分に的を絞るのかということであるが、「心と心を結ぶ」作業をしたといえる行動は、けいすけくんが「たいこたたき」をされているときに思わずけいすけくんにおおいかぶさり、一緒に「たいこたたき」されてしまうところの行動であろう。

(発問) たけしくんはどのような気持ちからけいすけくんをかばったのか

生徒にとってこの行動はどのようにとらえられるのか。素直にとらえられるであろうか。現在の中学生にとってこの行動は意外なものなのではないかと予測される。それは、はっきりと自分の気持ちを表すことは勇気のいることであるからだ。したがって、この発問に対して、疑いの眼でとらえる反応も予測される。しかし、行動した事実は事実であり、再度「たけしくんはどのような気持ちでけいすけくんをかばったのか」と、発問されることで、この事実を自分なりにとらえなければならなくなる。この話し合いこそ、友情について、それぞれの生徒が現時点でのとらえかたを確認し、さらにより深く認識することができる機会なのである。

(5) 指導事例 (第2学年)

ア 主題名 友情・信頼 [内容項目2-(3)]

イ 資料名 「ともだち」(文教社「中学生の新しい道1」)

ウ 資料の概要

けいすけくんのクラスでは、何かのきっかけからみんなでいっせいにだれか一人の背中を思い切りたたき「たいこたたき」というゲームがはやっていた。しかし、実際にはいつもたけしくんがやられていた。ところがある日、いつもたたいている側であるけいすけくんがやられてしまったのだ。「もうやめて」と叫ぶけいすけくんをかばおうと覆いかぶさったのは、何といつもやられているたけしくんだった。それでも二人への「たいこたたき」は続いた。ようやく「たいこたたき」が終わった時、たけしくんがけいすけくんを「だいじょうぶ」と抱き起こしたのだが、けいすけくんは「ほっといてよ…」と冷たく言う。

エ 資料の着眼点

人は何かしらのきっかけで他者への働きかけにより「ともだち」となる。そして友情をはぐくんでいく。たけしくんのけいすけくんに対する気持ちや働きかけはまさにそのきっかけである。

オ ねらい

温かいまなざしを土台として他者に働きかけ、「心のつながり」を構築していく過程の中から友情をはぐくもうとする態度を養う。

カ 指導過程

	学習内容と主な発問	予想される生徒の質問	指導上の留意点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> <li>「実は先生、困ったことがあってみんなの意見をぜひ聞かせてほしいんだ」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>先生は突然、何を言いつ出すのか。</li> <li>困ったことって何だ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師も一緒に考えたいのだという姿勢を示す。</li> </ul>
展	<ul style="list-style-type: none"> <li>「実はこの物語なのだが、登場人物の気持ちがいま一つつかめない」と言いながら、資料『ともだち』を配布する。</li> <li>資料範読する。</li> <li>☆たけしくんの気持ちについて考える。</li> <li>「みんなには先生がだれの気持ちがつかめなかったか、分かったかな」</li> <li>「実はたけしくんなんだ」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>何だ、また「いじめ」の話か。</li> <li>だれの気持ちが分からないのだろう。</li> <li>たけし</li> <li>けいすけ</li> <li>その他</li> <li>何で</li> <li>どこが</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>だれの気持ちを考えるのか、まだ知らせないでおく。</li> <li>ゆっくり読む。</li> <li>いじめの問題を取り上げようとしているのではないことを伝える。</li> </ul>

開	<ul style="list-style-type: none"> <li>『そのときだった～たいこたたきが終わった』とあるが「このとき、たけしくんはどういう気持ちからけいすけくんをかばったのだろうか」〈中心発問〉</li> <li>記入用紙を各自に配布する。</li> <li>記入用紙をもとに発言するようにする。</li> <li>「この二人がその後どうなったかだれにも分からないが、少なくとも二人の間には見えない何か働いたように思うのだが」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分と同じ思いをさせたくなかった。</li> <li>けいすけくんと仲良くなりたかった。</li> <li>けいすけくんが好きだった。</li> <li>自分へのたいこたたきもやめさせたかった。</li> <li>けいすけくんにもいいところがあった。</li> <li>けいすけくんと友達になるきっかけをつくりたかった。</li> <li>どうしてだか、分からない。</li> <li>相手を見直すこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発問を板書する。</li> <li>意見は板書する。</li> <li>意見を尊重する雰囲気をつくる。</li> <li>友達になるためにはまず相手に対して好意をもって働きかけることが大切であることを考えさせる。</li> </ul>
終末5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒たちの意見をもとに、教師の体験談なども織り交ぜ、友情についての話をする。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>文尾は「～なのかなぁ」程度に留める。</li> <li>友達は、あくまで対等の関係が最低条件であることを補足する。</li> </ul>

#### キ 評価の工夫

中心発問に対して、「自分の立場に置き換えて考察できたか」「友達になるためには、まず相手に対して何かしらの働きかけをすることの大切さが理解できたか」を評価の観点とした。それらについては、授業中に出た発言と生徒によるワークシートの内容で評価した。

#### ク 授業記録

##### ① 導入

答えを探り出そうというのではなく、中心発問に関して教師と一緒に考えていこうという姿勢で授業をスタートさせた。

## ② 展開

まず、教師がこの読み物資料で登場人物の気持ちがつかめないことを生徒たちに話し、資料を範読した。次に中心発問の「たけしくんはどのような気持ちからけいすけくんをかばったのだろうか」を考えさせるためのワークシートを配布した。

ワークシートからの発表では、次のような意見が出された。(抜粋)

- たけしくんは、やられて痛いというのを知っていて、けいすけくんの痛い思いが分かったから。
- たけしくんはけいすけくんと共通点を見つけて友達になりたいと思っていた。けいすけくんがみんなにたたかれているのを見て、もっと友達になりたいという気持ちが強くなったから。
- たけしくんはけいすけくんともっと仲良くなりたかった。
- たけしくんはけいすけくんを友達だと思っているので、やられているのを黙って見ていられなかったから。

このように、概ねたけしくんのけいすけくんに対する好意の気持ちが発表された。次に、「たけしくんがなぜけいすけくんに好意をもっていたか」を考えさせることによって、たけしくんがけいすけくんに求めている「心のつながり」に気付かせようとした。

これについては、つぎのような意見が出された。(抜粋)

- たけしくんはけいすけくんと共通点を見いだしたから。
- けいすけくんにもいいところがあるのを知っていたから。
- けいすけくんが自分に思えたから。
- けいすけくんがいいやつなのを知っていたから。

## ③ 終末

友達になるためには、まず相手のよいところを見つけて好きになるという、「温かいまなざし」が大切であることを念頭に置き、ワークシートの発表と、教師の体験談なども加えて、さらに生徒の考えを膨らませようとした。本時では友情についての結論を求めるのではなく、教師を含めた全員で考えるという形で終わった。しかし、生徒一人一人が真剣にたけしくんの立場に立って考えられていた。

## ケ 考察

この授業で最も重視したことは、「教師と共に考える授業」と「一つの発問を中心に生徒一人一人に一つの課題をじっくりと考えさせること」であった。ややもすると「いじめ問題」に生徒の関心が向かいがちになるであろう懸念も、展開の前段の教師の説明ではほぼ解消できた。また、ワークシートになかなか記入できない生徒や意見がまとまらない生徒もいたが、じっくり考えることはできた。一方、教師側の問いかけ方の重要性や難しさを痛感させられた授業でもあった。「なぜ」「だれが」「何を」といったごく普通に交わされる問いかけを、それらの使い方を間違えると生徒たちを混乱させてしまうことも同時に感じた。特に今回のような一つの発問に絞った授業においては、教師が、生徒の発問に対する切り返しの発問を精選し、十分過ぎる配慮が必要である。

### 3 内容項目2-(3)「友情・信頼」の指導のまとめ

第1分科会では、研究主題である「生徒の心に響く道德の時間の指導」に迫るため、内容項目2-(3)「友情・信頼」について取り上げ、研究を進めることにした。中学生の悩みの多くは「友達関係」であり、相談相手も、親や教師よりも友達を選ぶ場合が多く、不登校の要因の一つとして、友達関係の悪化が挙げられることなどを考えれば、「友情・信頼」は生徒にとって大きな関心事であり、研究主題に迫るためには、適切なものと思われる。

この時期の中学生は、「友情」というものを頭では理解していながら、実際にははじめがあったり、排他的であったりする。また逆に、心から信頼しあえる友達を欲しがったりもする。自我の確立とともに、自分に合った友達を求め始めている証拠でもある。うまく友情を築いていくためには、相手に対する「温かいまなざし」が必要なのであり、自立していく過程の中で、相互に認めあえる存在になっていかなければならないというのが、第1分科会の中での共通理解であるが、このことを生徒に気付かせ、また、普段の学校生活の中で実践していくための手助けとなれるようなもの、また研究主題を達成させるために適切と思われるものということで、資料「ともだち」を選定し、授業研究を重ねてきた。発問は一つに絞り、問題点を明確にして、生徒にじっくり考えさせる指導法、また、教師が生徒と共に考え、共に問題点を解決していこうとする指導法を工夫し、研究主題である「生徒の心に響く道德の時間の指導」を具現化することに努めてきた。

#### (1) 成果

- ア 資料について、先入観をもたせないように配慮したことにより、生徒に自分のこととして受け入れさせることができた。
- イ 教師が生徒と共に考えるという姿勢を示すことにより、行動の仕方や身の処し方を押し付ける授業から脱け出し、共に問題点を解決していこうとする授業を展開することができた。
- ウ あくまでも一つの発問を中心に授業を展開することにより、問題点を明確にすることができ、生徒にじっくり考えさせることができた。
- エ 指導案を工夫することにより、私たちにとって新しい指導構想を作ることができた。
- オ 研究を重ねる中で、「友情」についてのとらえ方を検討し、分科会の中で、「友情」の指導内容についての共通理解を図ることができた。

#### (2) 課題

- ア アンケートの集計結果を見ても、「友情」とは生徒たちにとってかけがえのないものであるということが分かるが、それをどのようにして日常生活の中に反映させ、より望ましい友情を構築させていくべきか、そのために道德の授業で何ができるのか、さらに研究を深めていく必要がある。
- イ 友情を築くためには、自分自身がどう成長するかが問題なのであるが、教師は、それをどのような形で援助できるのかを考えていく必要がある。
- ウ 指導法や資料の選定、より体験的・実践的な活動の導入などを工夫することで、より「生徒の心に響く道德の時間の指導」に迫るためにさらに研究を深めていく必要がある。

### Ⅲ 内容項目 2 - (5) 「他に学ぶ広い心」についての指導 (第 2 分科会)

#### 1 主題設定の理由

道徳の内容「視点 2」は、「主として他の人とのかかわりに関すること」である。生徒たちの最大の関心事の一つに、友達をはじめとする自分の身の回りにいる人たちとの人間関係が挙げられる。生徒は人間関係が広まるに従って家庭生活や学校生活の中で、自分の周囲にいる人たちとのかかわりについて考えるようになってきているのである。

中学生の時期は、肉体的にも精神的にも発達が著しく生徒一人一人の個性や立場がはっきりしてくるとともに、「自分なりに納得した生き方や考え方をしたい」と望んでいる。すでにこの時期には、人によってものの見方や考え方に違いがあることに気付いているが、人生の経験も浅く、ものの見方もそれほど広くはないこともあって、時として自分の考えや立場に固執し、対人関係に摩擦や対立を引き起こすようなこともある。また、一方では、他との衝突を恐れ、自分のものの見方や考え方を他人に同調させたり、同調を装ったりする傾向も見られる。このような問題は、人それぞれの個性や立場を尊重しようとする気持ちに欠けていることから生じるものと考えられる。

したがって、この時期の生徒に対しては、人それぞれによっていろいろなものの見方や考え方があることを十分に理解させ、自分の立場を客観的にみることができるようになるとともに、他の人の個性や立場を尊重する態度を育てるように指導することが大切である。また、ものの見方や考え方という面から人間を見たとき、人それぞれのものの見方や考え方があり、それらと接し、受け入れることがその人の人生を豊かにする上で極めて重要なものになっていると言えよう。このような前提に立てば、他の人に接する態度としては「それぞれの個性や立場を尊重すること」が求められ、自分自身に対しては「自らのものの見方や考え方を振り返る」ことが求められているのである。このことは、厳しい目をもって自らの至らざるを知り、その改善を図って向上に努めるとともに、他人の助言や忠告に謙虚に耳を傾けて自分のものの見方や考え方を広め、深めていくという生き方を目指すことにほかならないのである。

このように本項目の「他に学ぶ広い心」は、自らが不完全な人間であるという自覚に立って謙虚に他に学び、自己の向上に生かすことがその主旨であり、自らの問題に目を向け他の人との関係を培っていく中学生の時期に、本項目の指導は望ましい人間関係を形成する上でも、生徒一人一人の人生を豊かにする上でも欠かせない内容であると考えた。

そこで、第 2 分科会は、「生徒の心に響く道徳の時間の指導」として、内容項目 2 - (5) 「他に学ぶ広い心」について、内容項目のとらえ方、生徒の実態、教材の開発、発問と指導方法の工夫等を以下の仮説を基づいて研究を進めることとした。

自分のものの見方や考え方の至らざるを知ることにより、いろいろなものの見方や考え方を知り、自分の生き方について葛藤し、自己を確立することによって「他に学ぶ広い心」をもつことができる。

## 2 研究の内容と方法

### (1) 内容項目2－(5)にかかわる生徒の実態と指導内容のとらえ方

内容項目2－(5)は、「それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、謙虚に他に学ぶ広い心をもつようにする」ことを目指している項目である。人にはそれぞれ個性があり、それぞれの立場がある、またいろいろなものの見方や考え方がある。十人十色である。これらを理解し尊重するとともに自らの至らなさを知り、深く自問自答し、他の人の言うことに謙虚に耳を傾け、積極的に他に学ぶようにし、これを自己の向上に生かそうとする広い心を育てることを主眼にしている。

平成5年度の教育研究員報告書(道徳)において、「個性を生かすこと」、「自他を尊重すること」さらには「他に学ぶ広い心」について生徒の実態調査を行っている。それを参考にすると

①「個性を生かす」とは、自分自身の得意な点をのばすことであると約半数近くの生徒が考えている。

②「自分とものの見方や考え方の違う人のことをどう思いますか」については、2/3近くの生徒が人によっていろいろな見方や考え方があることを認めている。

③「相手を尊重するということは、どういうことだと思いますか」については、学年が上がるにつれ、相手の立場を理解すること、相手の良さを認めること、相手の考え方、意見をできるだけ生かそうとすることが、相手を尊重することだと受け止めており、成長するにつれ、いろいろな経験を重ね、相手を理解しようとする傾向にある。

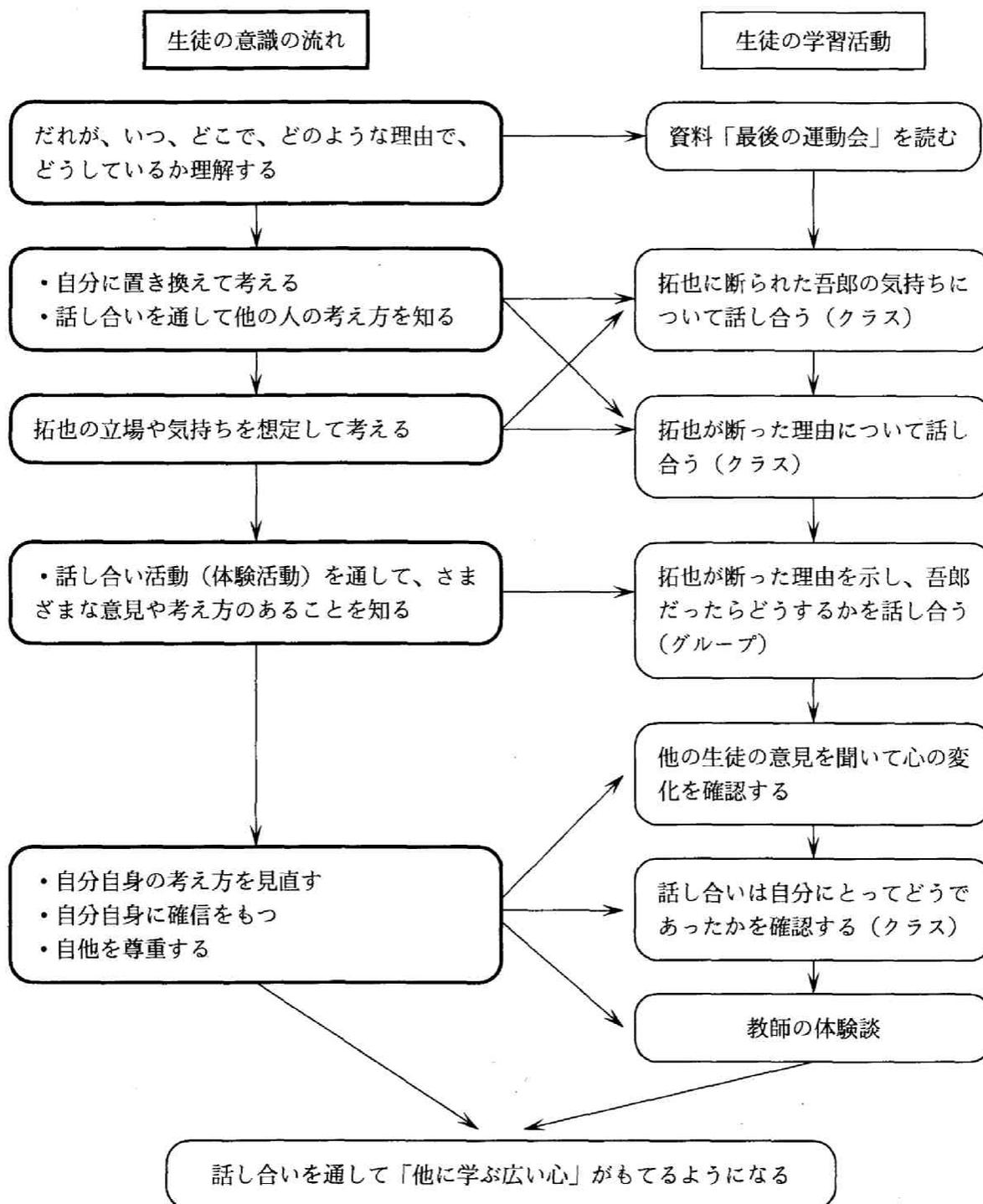
④「友達と意見がくい違った時、あなたはどうしますか」の質問に、各学年の8割以上の生徒が「もう一度相手の意見を聞き、自分の意見を見つめ直してみる」と答えているが、1割の生徒は「あくまでも自分の意見を通し続ける」と答えている。

⑤「あなたのために注意された時どうしますか」も9割以上の生徒が、「意見を聞いて考えようとする」を選んでいるが、一部には「不快に思い反発する」や「もっともだと思いが聞こうとしない」と答える生徒もおり、自己を主張する傾向が強い時期と考えられる。

以上のことから分かるように中学生の時期は、すでに人によってもものの見方、考え方に違いのあることに気付いている。身体的にも精神的にも成長発達の時期にあり、人それぞれの個性や立場がはっきりしてきている時期でもある。しかしながらこうした自我の目覚めに伴い、周囲への批判や自分の考えのみに固執しがちな傾向も顕著になってくる。友人間でも意見の対立や摩擦が生じたり、過剰な同調傾向が見られることも少なくないのである。まさに、心が未熟な時期である。

このような時期に、他に学ぶ広い心をもてるようになることが私たちは、重要なことと考え、内容項目2－(5)を取り上げた。他に学ぶ広い心をもてるようにするには、他を知り他人の立場に置き換え、他者への気付きを通して自らのものの見方や考え方を再吟味することである。これを道徳の資料「最後の運動会」を例にして授業展開を考えると以下のようになる。

生徒の意識の流れから考えた「授業展開例」



道徳の基本はよりよく生きる自己の確立にあり、それはよりよく生きる他者の存在を必要とする。生きることは他の人の援助を不可欠とするものであり、よりよく生きることは、他の人との豊かなかかわりによって実現していくものである。人間関係を豊かにし、望ましいものにすることは、人間としての生き方そのものを豊かにしていくことになる。

自分のものの見方や考え方を省みるとともに、謙虚に他者から学ぼうとする広い心の大切さに気付かせ、自己の向上を積極的に図ろうとする態度を育てたい。

## (2) 指導の工夫

### ア 資料作成について

第2分科会では、生徒だれにでも起こりうる学校生活の一場面を設定し、内容項目2-(5)の主題のねらいに迫ることのできる内容の資料を作り、授業で取り上げることとした。この資料は登場人物の置かれた状況を短い文で説明しただけのものである。したがって、この資料は読み物資料としての深みはないが、生徒にとって内容を理解しやすいものである。また、今までの日常生活での体験や思いから、より身近に登場人物の気持ちに対して想像力を働かせることができるであろうと考えた。私たちがあえて読み物資料を使わなかったことは、登場人物の心情を推し量ることよりも生徒相互の話し合いを通して、生徒の体験からいろいろな見方や考え方があることを引き出すことに主眼を置いたからである。そこで、資料作成に当たっては、登場人物の思いを具体的に書くのではなく「だれが、いつ、どこで、どのような理由で、どうしている」という5つのみに焦点を絞って資料を作成し、登場人物の置かれた状況から生徒一人一人がその心の内を推測できるようにした。

#### ① 資料の内容

- ・生徒相互が話し合いを通して主題のねらいに迫れる内容であるもの。
- ・学校などの具体的場面を取り上げ、生徒にとって身近に感じられる状況を設定する。
- ・読み物資料のように行間から登場人物の心情を推し量ることよりも、生徒自らの体験から意見を引き出すことに主眼を置いた内容とする。

#### ② 資料作りの構成

- ・だれが ⇒ 運動会実行委員の吾郎
- ・いつ ⇒ 中学3年の運動会
- ・どこで ⇒ 代替りの選手を決める学活の時間
- ・どのような理由で ⇒ 拓也が代替りの選手になることを拒否
- ・どうしている ⇒ どうしたらよいのか悩む

#### 資料 「最後の運動会」

吾郎は中学3年生。今年も運動会実行委員になった。運動会も前日にひかえてのことである。クラス対抗リレーの代表選手がケガをしてしまった。そこで、その代替りの選手を決めることになった。選手以外で速いといえるのは拓也しかいない。吾郎は拓也に頼んだが出たくないという。代替りの選手を決められるのは、この時間しかない。吾郎は思い悩むのだった。

### イ 導入の工夫

導入は生徒が興味・関心をもつ糸口であり、大切な部分ではあるが、時間をかけすぎたり展開部分とつながらない過剰な工夫はかえってマイナスになると考えた。生徒が拍子抜けしてしまうばかりか、展開部分の貴重な時間を割いてしまうからである。ここでは特にこの時間、気をつけてほしいこととして以下の3点を挙げることで導入とした。

- ・みんなで考えること、話し合うことを大切にしていきましょう。
- ・自分の考えを、自信をもって出していきましょう。

- ・友達の話をしっかり聞きましょう。

#### ウ 展開の工夫

生徒が「人によっていろいろなものの見方や考え方がある」ことを体験することが大きなねらいである。そこで、以下の3点に重点を置いた。

##### ① 登場人物の気持ちを並行して考える

同じ場面（学活での話し合い）における何人かの登場人物（吾郎、拓也）の気持ちを並行して、自分の言葉として考えていくことである。これにより生徒は、心に揺さぶり（葛藤）がかけられ、一方的な見方や考え方ではなく広い見方ができるようになると考える。ある事柄には自分の気持ちと同時に、自分とは違う他人の気持ちも存在していることを生徒に実感させるようにする。

##### ② いろいろな考え方があることを知る（グループで意見交換）

①でそれぞれの生徒が考えたことをふまえて意見交換をする。グループでの意見交換は自分の考えを発表するとともに、他の人の言いたいことや気持ちをじっくりと考える時間である。また、自分と同じ意見、自分とは違う意見があることを体験する場でもある。

##### ③ 話し合いの中で他の人の意見を聞いてどう思ったか（クラス全体で意見交換）

②までの意見交換を終えて、生徒が自分の心の動き、変化を見つめる時間である。教師が生徒の考え方をある特定の方向に誘導するのではなく、生徒が十分に納得して、自分の心の動きに気付くことが必要である。ここは、いろいろな見方や考え方を自分の中でどう受けとめて理解したかを確認、自分自身を客観的に見つめていく場と考える。したがって、教師が生徒の心の奥を十分に引き出していく発問や生徒の意見に対する受け方が特に重要である。

#### 発問の工夫（発問4指導事例 P.21参照）

「あなたは他の人の意見（考え）を聞いて、自分の意見（考え）が変わりましたか、変わりませんでしたか」

##### ○生徒の意見（考え）が変わったときの発問

- ・あなたはどの辺で意見（考え）が変わったのですか？
- ・あなたは〇〇さんの意見（考え）のどの辺がよいと思ったのですか？

##### ○生徒の意見（考え）が変わらなかったときの発問

- ・意見（考え）が変わらなかったのはどうしてですか？
- ・あなたは他の人の意見（考え）を聞いてどう思いましたか？
- ・あなたは同じ意見（考え）の人の話を聞いてどう思いましたか？
- 生徒の意見（考え）が変わったときの生徒の意見に対する受け方
  - ・あなたが気付かなかったことを聞いて、意見（考え）が変わったのですね。
  - ・〇〇さんはあなたが思いつかなかったことを考えたのですね。
- 生徒の意見（考え）が変わらなかったときの生徒の意見に対する受け方
  - ・あなたはこういう理由で意見（考え）が変わらなかったのですね。
  - ・みんなの意見を聞いてみて、こういう理由で変わらなかったのですね。
  - ・あなたはこういうふうに思ったのですね。

## エ 教師の姿勢

他の人の意見（考え）を聞いて自分の心の動きを見つめ、それを言葉で表現することは大人にとっても大変難しいことである。ましてや、生徒にとっては何をどのように話していったらよいのか戸惑うはずである。ここでは特に以下に記した教師の姿勢により、生徒からより多くの考えを引き出していった。

### ① 生徒の言葉を必要に応じて補って伝える

生徒はそのことにより自分の考えが伝わったことを確認する。また、教師としても生徒の考えを確認し、まわりの生徒に伝えることができる。話したいと思っていることを教師が分かってくれた。また、教師が分かろうとしていることは生徒の喜びにつながり、それが繰り返されることで、生徒自身が気付かなかったことも引き出せると考える。

### ② 生徒の気持ちに寄り添う

生徒の考えを否定しないで受け入れるということにもつながる。考えを否定してしまうことは、そこから先の生徒の考えを断ち切ってしまうことにもなる。生徒自身がありのままの自分の考えと向き合い、さらに考えていけるようにすることは大切である。

### ③ 生徒の言葉（気持ち）をじっくりと待つ

教師が誘導するのではなく、あくまで生徒の考えを自然に引き出すことが大切である。過剰な発問は時として生徒の考えを混乱させてしまうことになる。じっくりと生徒の一つ一つの言葉を大切に、生徒が自ら考えていけるようにしていきたい。

## オ 終末の工夫

### ① 教師が自分自身の経験を話す

#### 例 教師の経験談

私が中学生の頃、校内ではよく選挙ポスターが破かれる事件があった。周囲のだれもがこのようなことをする生徒たちを知っていたが、面と向かって注意をする者はいなかった。それどころか多くの者は見て見ぬふりをしていた。当時、選挙管理委員をしていた私は、この事件について何も言わないクラスメイトを強い口調で非難した。そのとき、ひとりの女子から「あなたはどんな時でも、自分の考えをはっきりと言えていいわね。けれど、思っていることを言えずに苦しんでいる子もいるのよ。その人の気持ちもわかってあげてほしい」ということばを投げかけられた。それまで、「自分の考えは絶対に正しい」と信じていた私にとってはとてもショックな言葉であった。

### ② アンケートを使う

本時のねらいに近づけたかを生徒がアンケートを使って振り返っていくようにした。これにより生徒が本時の主題をより確かに感じとることができる。と考える。

## カ その他の工夫（色カード）

検証授業の一つでは、色カードを使って生徒の意見の変化を知ることを行った。話し合いの中で生徒が意見を変えた時、カードの色を変えるものである。教師にとっては生徒の気持ちの変化をよく知ることができた。授業の展開により今後有効な使用方法がいくつもあると考える。

(3) 指導事例 (第2学年)

ア 主題名 他に学ぶ広い心 (内容項目2-(5))

それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、謙虚に他に学ぶ広い心をもつようにする。

イ 資料名 「最後の運動会」(自作資料)

ウ ねらい

自分の意見を持ち、他人の考えを聞くことによって、自分の考えを見つめ直していることに気付かせ、より積極的に他に学び、それを生かそうとする広い心をもつ態度を育てる。

エ 展開

	学習活動及び主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	1. 本時の注意点を意識させる。 「みんなで考えること・話し合うことを大切にしていきましょう」 「自分の考えを、自信をもって言ってみましょう」 「友達の話をしっかり聞きましょう」		・生徒の気持ちを緊張させずに、できるだけ和やかな雰囲気になるように心掛ける。
展開①	2. 資料の範読後、クラス全体で意見交換 【発問1】 『吾郎が思い悩んだときの気持ちはどうだっただろう』 ・プリントに書き込んでからクラス全体で話し合う。	・拓也がやってくれたらいいのにな～。 ・他の人にしてみようかな。 ・こんな仕事やるんじゃない。 ・拓也は無責任だよ。 ・拓也にやりたくない理由を聞いてみよう。	・吾郎の絵の掲示 ・クラス全体での話し合いでは、意見を一方向にまとめる必要はない。
展開②	3. クラス全体の意見交換 【発問2】 『では、拓也がことわった理由は何かだろうか』 ・プリントに書き込んでからクラス全体で話し合う。	・面倒くさいから。 ・体調が悪かったから。 ・怪我をしていたから。 ・抜かれると何か言われそうなので。	・拓也の絵の掲示 ・他の人(拓也)の立場に立って考えさせる。
展開	4. グループに分かれた意見交換 【発問3】 拓也が断った理由を示して『あな	・拓也にもう一度頼む ・他の人をあたる。	・グループでの話し合いでは意見を一方向にまとめる必要はない。

<p>開</p> <p>③</p>	<p>たが、吾郎であったらどうしますか』</p> <p>・プリントに書き込んでからグループで話し合う。</p>	<p>・先生に相談する。</p>	
<p>展</p>	<p>5. クラス全体で意見交換</p> <p>・全体で2～3人に話し合いの様子を確認をしてから「ここからは資料の話ではなくみんなの心の変化について考えてみよう」</p> <p>【発問4】</p> <p>『話し合いの中で友達の考え・意見を聞いて、自分の意見が変わった人（変わらなかった人）はいますか』</p>		<p>・吾郎と拓也の絵をかたづけ、「私」の絵を掲示する。</p> <p>・資料の話から討議の話にはっきり切り替える。</p>
<p>開</p>	<p>☆意見が変わった例</p> <p>「〇〇さんの意見のどの辺で変わったのかな」</p> <p>「それまで気がつかなかったことを聞いて変わったんだね」</p> <p>「聞いて参考になったんだね」</p> <p>「人の意見を認めたんだね」</p>	<p>・〇〇さんが意見を言ったときに変わった。</p> <p>・私と同じ考え方をする人がいたんだな。</p> <p>・私よりしっかりと考えている。</p>	<p>・生徒の言葉を言い換える。</p> <p>・生徒の気持ちに寄り添って同意するようにする。</p>
<p>④</p>	<p>☆意見が変わらなかった例</p> <p>「意見が変わらなかったのは、どうしてだろうか」</p> <p>「同じ意見の人の話を聞いてどう思った」</p> <p>「自分の意見がやっぱり正しいと思ったんだね」</p>	<p>・意見を聞いても変わらなかった。</p> <p>・私は同じような意見なので安心した。</p> <p>・私は私だから。</p>	<p>・生徒のことば（気持ち）が出てくるまでじっくり待つ。</p>
	<p>☆意見が変わらなかった例</p>		<p>・出てきた意見をもと</p>

	「こんな意見がでたけれど、それについてどう思う」	・何となく。べつに…	にして発問をさらに発展させていく。
展 開 ⑤	<p>【発問5】 『友達の話しを聞くということは自分にとってどうだろう』</p> <p>・プリントに書き込む。</p> <p>「これから積極的に友達の意見を聞こうと思ったんだね」</p>	<p>・自分の考え方が広がった。</p> <p>・自分だけでは考えられないことを知った。</p> <p>・これからは、多くの人の意見を聞いてからじっくりと自分の考えをもちたい。</p> <p>・これからの自分の考え方や行動に生かしていきたい。</p>	<p>・自分の考えを見つめ直していることに気付かせる。</p>
終 末	<p>6. 教師自身の同じような経験が、現在に生かされているような例を具体的にあげる。</p> <p>・アンケートをとる。</p>		<p>・これからの自己の向上に生かされるようにする。</p> <p>・アンケートをとることにより生徒自身にねらいをより確かに感じ取らせる。</p>

#### オ 評価の観点

本時の評価の観点として次の3つを設定した。

- ①自分の意見を持ち、他人の考えを聞くこうとする態度がもてたか。
- ②他人の意見を聞いて、自分の考えを見つめ直すことができたか。
- ③より積極的に他に学び、それを生かそうとする姿勢をもとうとしたか。

この点をアンケートを使って振り返っていくようにした。

#### カ 授業の考察

実際の授業の中では、「ぼくが知っているんだから正しいんだ」という発言もあり、他人の話しは聞いてもその意見を素直に受け止められず、自分の考え方の参考にはなかなかできない状況があった。

このような場合教師の誘導で授業が終わってしまうが、この授業では生徒が話し合いの体験をすることによって生徒の率直な意見を引き出し受け入れていくことに重点を置いた。また、教師が生徒の意見を受け入れるだけでなく、その言葉を補うことによって生徒自身が実感として気付いていけるようにした。最後に教師の体験談を交え、よりねらいに近づくことができた。

### 3 第2分科会のまとめ

第2分科会では、研究主題にかかわる生徒の実態をふまえ、内容項目2「主として他の人とのかわりに関すること」のうち(5)「他に学ぶ広い心」について研究を進めることにした。

私たちは、まず、「生徒の心に響く道德の時間」とは「生徒がまさに自分のこととして、その主題に向き合い、自ら考えることを大切にした道德の時間」と位置付け、授業の中に葛藤を起こさせる体験（話し合い）を通して、研究主題に迫ることを試みた。

この時期の生徒は、話し合いの中で自分の考えに固執しがちで、他人の言うことに耳を傾けようとしなくて周囲への批判に終始したりする一方、意見の対立や摩擦を避けようとする傾向も見られる。

道德の授業を進めるに当たって、資料は様々な意見が出やすく、葛藤を起こさせやすいものを考えた。学級での話し合いのきっかけとなりやすく、生徒の体験からも意見を引き出しやすい「最後の運動会」を自作した。

授業では、資料に基づいた話し合いそのものを体験的な活動ととらえ、その話し合い活動から自分のものの見方や考え方の至らざるを知り、いろいろなものの見方や考え方のあることに気付き、自分の生き方について振り返り、自己を確立することによって「他に学ぶ広い心」を育てることができると考え、授業を工夫した。このときに、教師と生徒が共に考えられるような授業の雰囲気をつくり出すようにも配慮した。

#### (1) 成果

ア 身近な内容を取り上げた資料であるので、日常生活に即して、生徒の話し合いが活発に行われた。

イ 短い資料を通して、「立場や状況」「場面設定」などの情報を、話し合いの中から考え出すことで、いろいろな人の立場を自分の身に置き換えて考えることができた。

ウ 話し合いの中で、結論は同じでも自分と違う考え方をしている人がいたり、自分では全く気がつかない考え方もある、ということに生徒は気付いた。

エ 授業研究では、人の話を聞き、自分の考え方に変化があったときに、色カードなどで提示する指導方法の工夫は、教師だけでなく周りの生徒にとって把握しやすかった。

オ 研究を進めていく中で、葛藤を起こさせる場面では、本研究のような資料構成では結論が一方方向にならないように、自由な意見が出され、いろいろな考え方に接することができる題材を取り上げることが必要であることが分かった。

#### (2) 課題

ア 本資料の話し合いの流れが「思いやり」や「基本的生活習慣」に傾きやすいので、配慮が必要である。

イ 内容項目2-(5)は他の多くの内容項目と関連があり、扱いを一つ誤るとねらいから外れてしまうことがあるので、ねらいから外れないように教師が生徒の話し合いの流れを確認しながら適切な助言指導をしていく必要がある。

ウ 話し合いの中で生徒の心に葛藤が生まれるためには、相対立する意見が出るような資料を開発することが必要である。

## IV まとめと今後の課題

一昨年神戸で起きた連続児童殺傷事件などを重く見た当時の文部大臣は、「心の教育」の在り方を緊急諮問した。中央教育審議会は「新しい時代を拓く心を育てるために〈次世代を育てる心を失う危機〉」と題する、「心の教育」の在り方について答申した。その内容は、学校教育に対して、「道徳教育を見直し、よりよいものにしていこう ― 道徳の時間を有効に生かそう」と道徳教育の充実についての提言をしている。

私たちはその提言を自分たちの課題とした研究にしていこうと、「生徒の心に響く道徳の時間の指導」を研究主題として掲げた。本年度は、第1分科会が内容項目2-(3)「友情・信頼」を、第2分科会が内容項目2-(5)「他に学ぶ広い心」を取り上げた。いずれも過去の研究員の方々が取り上げ、様々な角度から研究された内容項目であるだけに、「生徒の心に響く道徳の時間」をどのように創造すればよいかという視点から、何か新しい試みができないかと考え、ねらいとする価値の内容分析、資料選定と活用、発問の工夫等を行った。

第1分科会では、「友情」を、対等な立場にある個人と個人を結ぶ「心のつながり」ととらえた。道徳の時間では「心のつながり」に焦点を絞り、そのことを求めている人間の行為の奥にある気持ちに迫り、生徒と教師と一緒に考えていくという姿勢をとることによって、「真の友情」を認識させることができると考えた。また、授業研究では、発問の難しさに直面し、2度の検証授業を行うために多くの時間を費やした。そして、指導構想を考えるにあたり、従来の授業の発想から抜け出すために、発問を一つに絞り、じっくり考えさせることをねらいとした。

第2分科会では、内容項目の分析にあたり、中学生の時期を心の発達が未熟な時期ととらえ、この時期に「他に学ぶ広い心」をもてるようになることを重要なことと考えた。そして、他者への気付きを通して自らの考え方を吟味することを図式化して検討した。また、授業研究にあたっては、葛藤させることに重きをおき、自作の短い資料を作成した。その話し合いの中から、自分の考えに固執することなく、他人の意見に耳を傾けながら自分の考えを形成していくことの大切さについて、教師と生徒が共に考えられるような授業展開を試みた。

「生徒の心に響く道徳の時間の指導」の課題について、両分科会それぞれが方策を考えまとめてみた。「こんな工夫をしてみました」「こんな方法もありました」というのが、私たちの提案であり、成果でもある。

年間35週のうち、道徳の授業がどのくらい実施されているかという調査があったが、実態はどのようなのだろうか。今年度の研究を通じて、私たちは、「道徳の授業を継続することが大切だ」と実感することができた。道徳の授業が他の教育活動に転用されないようにするには、週時程の工夫、学校行事・学級活動との関連の明確化、指導体制の見直しなど、各学校、学年、学級において、まだまだ工夫する余地が残されている。何よりも、学級担任が、「道徳を教えるほど、人間ができていない」と開き直らずに、生徒と正面から向き合って、「一緒に考えていこう」という姿勢をもち、道徳の授業を進めていくことが求められている。研究授業で見せてくれた各学校の生徒の姿を振り返ると、道徳の時間を毎週きちんと行えば必ず生徒は変容すると訴えて私たちの研究のまとめとする。